

## 吉本隆明の社会理論(8)

### 『マス・イメージ論』と『ハイ・イメージ論』

宮本孝二

キーワード：吉本隆明，マス・イメージ，ハイ・イメージ，対象化

はじめに

第一節 『マス・イメージ論』から『ハイ・イメージ論』へ

第二節 対象化と社会形成の理論

第三節 都市と消費社会の理論

おわりに

### はじめに

1980年代から90年代前半にかけての吉本の著作は多数あるが、そこにイメージという言葉タイトルを組み込んだ2つの著作を見出せる。『マス・イメージ論』と『ハイ・イメージ論』三部作である<sup>1)</sup>。前者は82年から83年にかけて文芸雑誌に連載され84年に単行本として出版され、後者は80年代後半の連載分を単行本としてまとめた後に90年代の前半に2冊の続編が刊行されたも

1) 『マス・イメージ論』福武書店、1984年（文庫版、福武書店、1988年）。『ハイ・イメージ論Ⅰ』福武書店、1989年（文庫版、筑摩書房、2003年）。『ハイ・イメージ論Ⅱ』福武書店、1990年（文庫版、筑摩書房、2003年）。『ハイ・イメージ論Ⅲ』福武書店、1994年（文庫版、筑摩書房、2003年）。

のである。吉本の著作から社会理論を抽出しようとするこの連載稿の目的にとって避けては通れない一連の著作群である。

本稿が8作目となるこの連載稿で明らかにしてきたように、とくに60年代の理論三部作ともいうべき『言語にとって美とはなにか』（以下、『言語美』と表記）、『共同幻想論』、『心的現象論序説』（これだけは70年代になってから単行本化された。以下、『心的現象論』と表記）からいわば一般理論としての社会理論を抽出できるのだが<sup>2)</sup>、『マス・イメージ論』と『ハイ・イメージ論』ではその理論的視点が活用されつつ、一般理論すなわち対象化の理論と社会形成の理論が一層の展開を見せ、さらには現代社会への鋭い洞察に富んだ議論が新たに展開されている。ただし本稿では整理の都合上、まず第一節においては主として『マス・イメージ論』の諸論考の内容紹介とそれらの一般理論的意義と現代社会論的意義の簡潔な指摘を行い、『ハイ・イメージ論』についてはその目次構成と検討史の紹介を示すにとどめ、第二節および第三節でそれらの一般理論的意義と現代社会論的意義を詳細に論じることとしたい。

第二節では、『ハイ・イメージ論』の一般理論的意義を対象化と社会形成の理論として提示する。前述のように吉本のいわゆる理論三部作では、人間と社会の基本的な存在様式が基本に据えられ、そこから理論が展開されていたのだが、その点が『ハイ・イメージ論』において一層鮮明にされているのであり、また、一般的な社会理論にとって不可避の課題である社会形成の理論についても新たな展開を見せているのである。

第三節では、現代社会論として、『ハイ・イメージ論』が都市と消費社会の理論を展開していることを示す。都市の理論と消費社会の理論は80年代吉

---

2) 拙稿「吉本隆明の社会理論（2）対幻想とは何か」『桃山学院大学社会学論集』第38巻第1号、2004年。「吉本隆明の社会理論（4）基礎理論としての心的現象論」同誌第39巻第1号、2005年。「吉本隆明の社会理論（6）『言語にとって美とはなにか』」同誌第40巻第1号、2006年。

本著作の主要な流れに属しており、この時期に吉本は左翼批判を徹底化させ、現代社会のあらたな方向性に正面から取り組み、刺激的な都市論と消費社会論を提示したのである。

### 第一節 『マス・イメージ論』から『ハイ・イメージ論』へ

『マス・イメージ論』は、「変成論」、「停滞論」、「推理論」、「世界論」、「差異論」、「縮合論」、「解体論」、「喩法論」、「詩語論」、「地勢論」、「画像論」、「語相論」といった12の論稿からなる。ここでは小説や詩やCM映像やマンガを素材に、作品の背景にあるマス・イメージを解明するという方法が採用されている。吉本は狭義には文芸評論家であり、その専門性においては文芸作品やそれに準じる芸術表現の意味の解釈の達人である。その意味解釈の際に、独特の現代社会論的視点や、いわゆる理論的三部作に代表される吉本理論といわれる理論的視点が活用される。文学作品を対象としている点ではすべての論考は『言語美』の系列にあるが、分析の視点はあたかも現在の共同幻想を多様な表現芸術をてがかりに解明しようとするものであり『共同幻想論』の現在版という位置づけも可能である。そして随所で活用されるのは『心的現象論』で提示された対象化を基軸とした心的世界の解明の成果である。したがって『マス・イメージ論』に収録された各論考は、多様な作品を題材にそれを意味解釈するなかで、独特な理論的視点を提示するというかたちになっている。各論考の要旨を簡潔に紹介しつつ、理論的三部作との関連づけ、および現代社会論的意義を明らかにしておこう。

「変成論」では、『心的現象論』で提示された分裂病的（現時点での用語法では統合失調症的）特性についての議論が、自己の身体への意味づけの変成、体感異常の世界の生成、被害妄想的なイメージによる世界の変成、現代家族の変成と関連づけつつ展開される。それはまさに対象化の理論の基礎にある、対象化の累乗が意味づけられた世界を生成し、そのような絶えざる対象化こそ分裂的な変成さえも可能にしてしまうという視点の現れである。そ

して現代社会論としては、世界の被害妄想化ともいうべき被害妄想や追跡妄想の世界に似た、現在のイメージ変成の世界の生成が指摘される。

「停滞論」では、世界図式の停滞とそれを背景にした文学者たちの倫理の表現が批判される。これは82年の『「反核」異論』にまとめられた議論の展開の最初の論考であった<sup>3)</sup>。世界を二つの勢力の対抗図に単純化し、社会主義の側に立つのが進歩的、良心的と思ひ込む、スターリニズムへの無根拠な賛同は思考停止の産物であり、翼賛会的に反核声明を出そうという発想も、正義や倫理を文学的感受性なしに表明することも、停滞を示す以外のなにもでもないとして吉本は批判した。国家の管理と調整に抑圧された市民社会において、停滞が理念の郷愁をさそう仕組みが洞察され、過去世界へのノスタルジアを現在の批判への倫理的根拠とすることは、人間社会の変化のとらえかた、その諸問題への対処の仕方として間違っており、停滞を過去の光景に収斂することなく、ただ未来にむけて放つべきだという現代社会論の基本姿勢が鮮明にされた。

「推理論」は、推理するという心的現象をとりあげている。時間的空間的距離を一挙に短縮し接合するのが、推理という意識の作動である。既往と未往を交差させたいという欲求、遠隔にある場所を一瞬に接続させたいという欲求がその基盤にある。推理の本質は、既知である作者の世界把握に語り手が遭遇し、未知を解き明かされる仕方であり、既視体験に類似したイメージをもつ。未知を体験しつつある語り手と、すでに体験を既知とする作者が交差し、了解の結果が了解を始めるという対象化の累乗の構造が示されている。

「世界論」は先の「停滞論」を受けて、古典近代型の世界像が倫理の壁となっている世界心情のありかたを洞察し、世界心情を正面におしたて世界を組織する普遍原理のように装いその背後に隠れる世界理念と、それが収斂して作る倫理の壁を批判する。古典近代から逸脱せざるをえないのが現在の必

---

3) 『「反核」異論』深夜叢書社、1982年。

然であり、先覚的な文学作品では、推理力と想像力、理解と想像の系列が、輪郭が危うく保たれている世界模型を生成し、世界の解体と脱構築に取り組んでいると指摘する。

「差異論」では、世界理念や世界模型の形成の課題について、自ら測量し地形を調査し自分で地図に書き込まなければならないと述べ、世界理念の現在の達成を見極めもできず、世界の解体もできず、過去の世界模型をなぞっている理念は、すでに乗り越えられていると批判する。これもまた「停滞論」の流れの議論であり、停滞した文学と理念だけが、世界の差異を現在でも人為的な分類線で画定できると思込んでいると指摘し、世界の本質的な差異を感受する世界理念の創出を課題として提起する。

「縮合論」は『言語美』のまさに表現転移論の新段階を示す論稿であり、80年代のポップ文学やエンターテインメントの世界において、裾野からはじまる量的なスペクトラムのそれぞれの層が縮合されて強固な同一性の階梯をつくっていること、その量的なスペクトラムのそれぞれの層の様式の縮合によって達成されている質が高度であることを明らかにしている<sup>4)</sup>。『言語美』において話体表現は、無意識的に通俗化したり、意識的に下降する可能性は指摘されていたが、無意識的な高度化や意識的な上昇はありえないと判断していた<sup>5)</sup>。しかし、無意識の縮合面の上に世界の画像を選んでいる縮合された話体の空間、無意識の必然としての話体表現は、言語的秩序とは無関係に高度化や上昇の通路をもちうようになったと言うのである。

「解体論」はやはりポップアートの世界を対象にして、そこに表現されるマス・イメージは高度なシステムに対応して露出された無意識のありかたで

---

4) この領域の作品や表現についての論及を、吉本は80年代になってから急速に増加させた。『マス・イメージ論』とほぼ同じ時期に刊行された『相对幻論』（栗本慎一郎との対談集）冬樹社、1983年や『重層的な非決定へ』大和書房、1985年にもそれが示されている。

5) 『言語にとって美とはなにか I』角川文庫、1982年の「第IV章表現転移論」における重要な指摘である。

あり、システムの文化概念の波をまともにかぶった場所でシステムの価値概念からの自由な離脱と逃走が行われ、縮合と解体によって、システムが付加する構造的な高度な未知の価値や論理が明らかにされると主張する。マス・イメージは経済社会的な根拠に還元できないという吉本の『共同幻想論』の基本視点に基づき、現代社会論としてのその現在版の構築に向けた方向性の一端が示されたと言えよう。

「喩法論」では、意味するものと価値するものとの二重に分裂した言語イメージの激しい徴候としての若い世代の詩作品を題材に<sup>6)</sup>、現在を透徹した言葉で覆いつくせないとき、暗喩によって、言葉に表現されたものをまた言葉を媒介にとらえる迂回路があること、そこでは全体的な喩は主題の全体性と決裂し、語りは物語化や虚構化と激しく対立していることを明らかにする。さらに女性詩人の作品に、構成化や物語化といった一切の制度ができあがってしまうことへの言葉自体によるラディカルな拒絶の暗喩を見だし、現代社会に生きる女性の意識世界のありかたを探究している。

「詩語論」も「喩法論」同様、詩作品についての分析である。言葉の世界と事実の世界を重ねわせるとは、事実の世界の像に、それとはまったく異次元に隔絶された言葉の世界の像を重ね合わせることである。事実の世界に流れている意味に抗うときだけ存在を垣間見せる世界の生成である。それは、本来的には言葉として閉じられるべき世界を、あたかも事実の世界であるかのようにみなす体験であり、内在する言葉の世界を事実の世界の意味の流れで外装しようとする試みである。

「地勢論」は物語論である。すでに造られた絶対的な地勢と、等高線をいわば差異線として現在が造りつつある地勢図との間の空隙が、文学の言葉がつくれるはずの暗喩の空間であるという基本的視点から、現在がつくりだした文学作品の地勢図をいくつかの要素にときほぐし、歴史や時間とみなされ

---

6) 詩人でもある吉本には詩論も多く、代表的なものに戦後日本の社会と文化の変動との関連で試作品を論じた『戦後詩史論』大和書房、1978年がある。

ているものの言葉を地勢図の拮がりへ変換し、現在というものの有限だがその向こう側はない境界点の暗喩や、その境界点にありながらそれを現在だとみる意識の覚醒の暗喩などの成立が展望される。

「画像論」は、まずテレビ画像の視線論的位置づけを明確にし、それからテレビCM作品を題材に、映像表現と言語表現の絡み合いをまさに表現論として純粋に追究し、そこから現代社会論的展開にまで到達している<sup>7)</sup>。また、現在の共同幻想の世界を映像作品によって分析するという新基軸を打ち出し、対象化の高度化、対象化の累乗という現代社会の意識の世界が描かれる。視線の変更や、もう一つの眼をもつことによって微細化と緻密化が可能となり、音声と文字と画像と音楽によって実体にイメージを付加するCM作品が生み出され、さらにそれが高度化されると、瞬間的に成立するドラマ性あるいは物語性によって瞬間的に打ち消されるCM効果や、商品の価値の崩壊を暗喩するイメージを付加することが商品の価値を高めることだという二律背反的CM効果が実現されるに至った。この瞬間的なドラマあるいは物語の成立するところでCM画像主体によってCMが否認される契機のうちに、瞬間的に現在というものの姿を垣間見ることができ、小市民的な平穏さが攪乱される解体の表象、現在の無表情な空虚、明るい空しさともいうべきイメージを見ることができる。

「語相論」は漫画作品（コミックス画像）を題材に<sup>8)</sup>、画像表現と言語表現の絡み合いをまさに表現論として純粋に追究している。画像と言葉とが補いあいながら、拮抗したり矛盾したりしつつ、物語が展開される。画像と組み合わせることが可能な言語の位相を、その同一性と差異の全体にわたって

---

7) 吉本が熱心なテレビ視聴者であることは『情況』河出書房新社、1970年に収められた「芸能の論理」で初めて自ら語ったが、註4で紹介した『相対幻論』や『重層的な非決定へ』ではその成果が示され、80年代以降さらに増加していった。

8) 漫画作品への関心は、吉本の長女（次女が小説家の吉本ばなな）が漫画家になったことと関連があると言われるが、「語相論」以降には漫画作品への言及はほとんどない。

はっきりと抑えきる方法や、画像の様式化と言語の位相を平準化する方法もある。言葉の位相の多重化を解明したこの論考によって、『言語美』の世界はあらたな段階に達したと評価できる。

以上のように、『マス・イメージ論』は、文学作品やテレビ映像や漫画作品を批評することで、現在という「作者」の全体像、現代社会の文化的深層に迫ろうとする試みであり、そこにそれまでの吉本の理論的蓄積が投入されていた。しかし吉本が自認するように、まだ作品批評に重点が置かれ、あるいは作家論的などころに焦点が合わせられ、未知の現在への追究は本格化しておらず、社会理論の抽出も断片的とならざるをえなかった。しかし、未知の現在からの重畳波への対応が引き継がれた『ハイ・イメージ論』には、体系的に社会理論を構築するのに有用な内容が豊富に含まれていた。

『ハイ・イメージ論』は、『マス・イメージ論』とは異なり作品論だけから構成されていない。文学作品を題材にした議論もあるが、ファッションや舞踏のような表現をも題材とし、さらには映像論、都市論、経済論、原理論なども多い。世界視線という概念が一つのキー概念となるが、それは前述の詩語論に登場する世界視線とは異なる意味づけである。『ハイ・イメージ論』は三部作でⅠには「映像の終わりから」、「ファッション論」、「像としての文学」、「映像都市論」、「多空間論」、「地図論」、「人工都市論」、「像としての音階」、「連結論」、「走行論」、「形態論」、Ⅱには「拡張論」、「幾何論」、「自然論」、「分散論」、「パラ・イメージ論」、「段階論」、「普遍喩論」、「視線論」、「表音転移論」、Ⅲには「舞踏論」、「瞬間論」、「モジュラス論」、「エコノミー論」、「幼童論」、「消費論」が収録されている。

多様な議論がランダムに配列された『ハイ・イメージ論』を体系的に整理して把握する試みは少なく、文庫本三部作に付された芹沢俊介の解説と、吉本研究では多大な貢献をしている山本哲士の試みが目につく程度である<sup>9)</sup>。

9) 芹沢俊介「解説」『ハイ・イメージ論Ⅰ－Ⅲ』筑摩文庫、所収。山本哲士「『ハイ・イメージ論』をどう読むか」吉本隆明研究会編『吉本隆明が語る戦後55年8マス・



芹沢の解説はハイ・イメージ論の三分冊にそれぞれ掲載されている。Ⅰでは、世界視線と普遍視線をキー概念に論考を整理し、Ⅱでは、世界視線と神の視線との差異を明らかにするという方向性を設定して論考を整理し、Ⅲでは反転、瞬間、境界、反復、遅延を暗喩の様態として把握しそれらをキー概念に論稿を整理する。いずれも示唆的だが、本稿のめざす社会理論の抽出とは方向性が違うレトリカルな議論になっている。一方、山本の試みは社会理論の抽出という本稿と同様の趣旨をもつが、独自の高度資本主義論に活用できる部分のみに本来の関心があり、収録された諸論考の編成について議論はしているものの、吉本の社会理論を本稿のようなかたちで体系的に抽出し整理するという方向性はない。

それでは本稿の方向性とは何か。すべての論考のなかに、吉本の一般理論的意義ないし現代社会論的意義を見出し、継承発展させるべき論点を残りなく取り出し整理することにはほかならない。第二節では、拙稿がこれまでに明らかにした吉本の理論的一貫性を示す視点、すなわち対象化の理論と、その線上に展開される一般理論のもう一つの課題、社会形成の理論との2つの理論的展開について、対応する諸論考から論点を抽出して整理し、第三節では、現代社会論の主要領域である現代都市と消費社会の高度化という2つのテーマについて、対応する諸論考から論点を抽出して整理しよう。

## 第二節 対象化と社会形成の理論

人間の本質的な特性、他の動物とは隔絶する点を、ここでは端的に意味づけと資源動員に求める。意味づけとは、人間が多様な対象を意味づけること、すなわち意味づけることによって対象とすることであり、それらの対象は資源として動員され、資源動員を媒介に意味を表現したり、資源動員によって資源を移転させたり、資源を変化させたりすることができる。対象化の原点

は、自らを対象化し、さらにそれを対象化し、という対象化の累乗という人間独自の特性である。意味づとしての対象化は対象形成としての対象化、すなわち資源動員とも連動し、人間の社会と文化を構築してきたのであった。そのような意味づけと資源動員の理論、対象化の理論の構築に吉本は豊かな知見を提供してくれる。吉本の多様な論考を、対象化の理論という観点から見ると、その意義が一層鮮明になるのであり、『ハイ・イメージ論』においても同様である。

対象化の理論では、自然の中から対象化によってその存在を確立していく人間、その人間が実践する意味づけと表現の展開という一連の過程が分析の中心テーマとなる。「幾何論」と「自然論」で対象化、すなわち意味づけと対象形成を行う人間存在を理論的に基礎づけ、対象化による認識世界の構成について「走行論」や「形態論」や「モジュラス論」などで論じ、そのような認識世界の言語的表現への過程を「パラ・イメージ論」、「段階論」、「普遍喩論」、「視線論」という連作で描き、「像としての文学」と「拡張論」では『言語美』で提示した指示表出と自己表出およびイメージ生成と表現という基本的な概念ないし論点をあらためて理論的に基礎づけ、「瞬間論」では人間が生きる瞬間を対象化された心的世界として描き出し、「幼童論」では反復という対象化の特殊形態を論じる。そして言語表現以外の人間の意味表現と意味解釈の世界に取り組んだ「ファッション論」、「像としての音階」、「舞踏論」がさらなる展開として付加されている。

対象化は意味づけと資源動員である。吉本はそういった表現は使わないが、明確にこの理論的視点を採用している。60年代に発表したマルクス論において明らかにされていたように<sup>10)</sup>、吉本はマルクスの自然哲学にその視点を見出し、それを正確に理解し継承したのだが、「自然論」ではそれが改めて確認されている。対象化の作用が自然から人間を疎外し、人間の対象化活動が

10) 吉本のマルクス論は現在ではすべて『カール・マルクス』光文社文庫、2006年に収録されている。

自然に作用し、という人間と自然の相互作用が他の動物とは異なる人間のありかたであり、社会の形成につながっていくという視点である。しかし「自然論」ではそれだけでなく、ライプニッツの神と自然、アリストテレスの自然学、偶然と必然、ヘーゲルの自然概念、自然と意識、ヘーゲルからマルクスへ、そしてマルクスの自然と対象化へと難解な議論が展開され、次のような結論に到達する。対象化の行為によって対象の加工や変形が生じ、そしてそれを知覚するという過程として時間-空間の変様がもたらされること、時間-空間の変様体が価値化の領域の基底にあること、そして価値化の領域は道具の高度化によって線分、平面、立体、そして次第に多次元体の図像に近づくことを吉本は導出したのだった。時間-空間の変様体とは、対象化によって人間と自然のありかた自体が変化することを示し、とくに高度産業社会においては人間と自然の相互作用が、人間と自然のありかた自体を根本的に変様させてしまい、対象化によって生み出せされる価値も単純な水準にとどまることはできない。ここに対象形成における対象化の対象化、すなわち対象化の累乗という人間存在の本質が示されている。

吉本はかつて『心的現象論序説』で時間化と空間化をキー概念として、対象化の基礎理論を提示した。そこでは生命有機体のもつ原初的な対象化である原生疎外、その対象化世界を対象化することによって生成される純粹疎外という概念が示されたが、純粹疎外こそ対象化の対象化と端的に表現しうる、人間の本質的特性なのであった<sup>11)</sup>。「幾何論」ではスピノザ、デカルト、ヘーゲル、ライプニッツの幾何学的思考を検討し、対象化作用に人間の特性を見いだす思考の流れをまとめている。たとえばヘーゲルを論じる際に吉本は次のように述べる。反省を数限りなく繰り返すことで、対象との関係がじぶんととの関係に転化したものが、ヘーゲルでは自我とよばれている、と。ライプニッツについても次のように述べる。ライプニッツが有機的生体を自然機械

11) 『心的現象論』角川文庫、1982年の「Ⅲ心的世界の動態化」における重要な指摘である。

とみなしているのは、モノダをつくりだすモノダとして、有機的生体にたいしてメタの位置に立ちうるからであり、自然機械には機械にたいする機械という視線を与えられる、と。

「瞬間論」にも、この対象化の対象化という本源的作動が鮮明に表現されている。生きるという過程は瞬間の連鎖である。この瞬間における心的現象は、人間が対象を感覚、知覚することによって構成され意味づけられた世界における自己のありかたをさらに対象化し、そして行為を実践するという一連の過程の瞬間的ありかたである。すなわち世界を対象化することによって生成される意味づけられた世界は瞬間的な過去であり、それを対象化する瞬間に未来が成立し、それは瞬間的に過去に繰り込まれる。意味づけられた世界は過去に属するが、それを対象化し、自己を対象化していく絶えざる心的作用は未来に属し、しかし瞬間的に過去になる。対象化の累乗こそが瞬間における過去と未来を成立させる。絶えざる対象化こそが人間の本質的特性であり、それが自我の存立を可能にするが、絶えず自己に繰り込まれ、新たな対象化の作用が未来に向けて自我の生成を可能にするのである。

また「幼童論」では、幼童性や幼童の物語の特性を反復という概念で把握している。ここで反復とは対象化の反復に他ならず、対象化の累乗に踏み出す以前の段階にとどまっている対象化の特殊形態なのである。対象化の対象化という連鎖が続くのではなく、同様の対象化が反復されている状態がまさに人間の幼児段階の特性であり、そのような幼童性の物語は反復の形態をもち、あるいは反復のもつ力強さ、すなわち幼童性を保持したパーソナリティのパワーを描き出していると吉本は論じている。

さて、対象化の理論の原点は『言語美』であることを拙稿で明示したが<sup>12)</sup>、「拡張論」ではそれをソシユール言語学を検討するなかで再確認している。スミスの国富論から始まり、経済学史をたどりながらマルクスの価値形態論

12) 「吉本隆明の社会理論（6）『言語にとって美とはなにか』『桃山学院大学社会学論集』第40巻第1号，2006年。

にまで至り、使用価値と交換価値との類比で『言語美』の指示表出と自己表出の2つの概念を位置づけなおし、さらにソシュールを再論するなかで、対象化の累乗としての表出について理論的な基礎づけを一層推進している<sup>13)</sup>。すなわちソシュール言語学との根本的差異は、想像的自己と対話する自分自身という構成、内的な反復とその固定化を、自己表出として明確に理論化できたところにあると結論づけられたのである。

また『言語美』での論点の一つに像の問題があった<sup>14)</sup>。像とは文字通りイメージである。人間の行為は、あるいは表現活動は、イメージを生成しつつ進行する。日常的に人々はそのイメージを言語的に表現することはない。知っているが、イメージを描けるが、それは言語的表現とならず、しかし表現しないが実際にはそれが根拠となって行為が実践される。文学は、そのようなイメージの世界を言説化する過程において産出される。したがって文学論は、たんに文学についての議論ではなく、イメージとその言語的表現の一般理論の可能性を秘めており、したがって対象化の理論のまさに中核をなすものなのである。その意味で『ハイ・イメージ論』の文学論のウエイトは重く、そこには対象化の社会理論として抽出するに値する貴重な議論が見られる。

「走行論」はいわゆる対幻想の現代的諸相が描かれた小説を題材にして、対幻想という特殊な意識形態を想像的に構成し表現する過程、すなわち対象選択と対象表現という走行の歩幅と速度を論じている。内容的には現代社会における性や家庭の存在様式がテーマであるが<sup>15)</sup>、理論的には対幻想の対象化のありかたが検討されていると言えよう。

「形態論」には対象化における、対象への意味づけにおける一つのありか

---

13) 同上論文において、指示表出を対象化、自己表出を対象化の対象化と定義したが、ここにおいてその正しさが再確認できる。

14) 『言語にとって美とはなにかI』角川文庫、1982年の「第II章言語の属性」。

15) 現代の対幻想の行方について吉本は、『対幻想—n個の性をめぐって』(芹沢俊介によるインタビュー記録)春秋社、1985年や、『家族のゆくえ』光文社、2006年で論じている。

たが明らかにされる。人間は世界の諸対象を意味づける。その際に対象の形態を対象化を重ねる中で一般化していく。対象についての概念の形成があり、固有の対象についての形態認知がある。対象の概念形成、形態認知に、音韻と韻律の対象化が重ね合わせられる。それによって形態認知は一層明確になる。形態を表現する言語の成立は、形態認知を一層明確化し、それによって形態が一層明確に世界から切り出される過程を推進する。

「モジュラス論」には、人間が創造し表現する物語の展開、個性的な表現主体による個性的な表現に見られる個性を、吉本はモジュラス（法）という概念によって把握する。反復する概念、反復するイメージは物語だけではない。あるいは物語は文学だけにあるのではなく、人間の意味づけられた世界は物語られない物語、言語表現されない物語、言説化しない意識ともいえるのであり、人々はそれぞれ固有のモジュラスを保有していると言えるのである。さらに「モジュラス論」では、物語の構築（対象化による言語表現）をさらに対象化する視点から物語を解体し、一層高度な物語の構築を行う主体の作用のありかたを明らかにした。主体による対象化において、主体は見えない構造によって拘束されており、そのような主体から絶えず逃走すること、すなわち対象化に対象化を重ねることによって、構造を超えたあらたな可能性を開きうるという視点である。

イメージの世界は意味づけられた世界であり、それを言説として表現していく文学作品の創造過程には、人間の意味づけられた世界の生成の機序が示される。普通の場合、人々の意識は実践的意識なのであり、言説的意識すなわち言語化された表現作品とはならないが、表現された作品、作品の表現において実践的意識の構成や作動が顕在的となるのである。以下の4つの論稿「パラ・イメージ論」、「段階論」、「普遍論」、「視線論」は、宮沢賢治の作品を題材に展開される物語論であるが<sup>16)</sup>、対象化の対象化という複合的重層

16) 吉本は少年時代から宮沢賢治の作品に親しんでおり論考も多く、本稿のテーマであるイメージ論の執筆と同時期に『近代日本詩人選13宮沢賢治』筑摩書房、1989

的過程，認識と表現にかかわる総過程について重要な示唆を与えてくれる。

「パラ・イメージ論」は言葉の概念と像とのかかわり，概念の強度とイメージ形成の鮮明度との関係を，文学作品のなかで言葉が像をよびおこすときのその像の位置づけを論じることによって検討する。パラ位置，メタ位置，オルト位置，オルトパラ位置という概念は煩瑣でやや混乱を招くが，言語表現が喚起するイメージの問題が論じられている。対象化の累乗は進行すればするほど，感覚のイメージから離脱し概念化していく。人間は感覚的なイメージで把握される意味づけられた世界に生きる。次にそれを言語で表現しようとすると，対象化が累乗すればするほど，イメージ喚起力は強化される。それに反比例して，イメージの具体性，特殊的固有性は減退する。しかし，言語表現を媒介にして，感覚的イメージは一層鮮明なイメージとなる可能性をもつ。さらに視覚器官を媒介にせずにつくられたイメージも言語表現によって可能になる。このようにイメージ表現にかかわる理論的問題の解明に吉本は取り組んだのであった。

「段階論」は，物語が音声によって語られることから，文字に書かれることへと転化していく過程で生じる膨大な分離と差異が，表現された物語にさまざまな痕跡をとどめていることを明らかにする。内的な独白や内省的な言葉と時間は，語りの言葉が記述されたときから，記述された言葉に運命は移って行く。物語りは表面的には，たくさんの人物，情景，場面の組み合わせの織物であるが，実は文字によって出あう言葉の準位，段階，形態の諸状態で生成される差異の構築なのである。

「普遍喩論」では，文字による表現の第三段階として普遍喩を位置づける。普遍喩とは作品の運命にたいする他者の観点からの表現であり，作品をあたかも他者の眼で対象化することによって生成される。作品の運命の内部につつまれながら，作品の運命を客体視できる位置にあるのが普遍喩なのである。

まさに対象化の対象化が生み出す一つの表現といえよう。そして吉本は、かつて古典語と古典詩歌がはじめて文字によって記述されたとき、民族語の無意識のリズムによって、最初に普遍的な喩の固有性が生じたと指摘し、対象化の累乗の絶えざる過程の歴史的原初にまで視野を広げている。

「視線論」では、作品のなかに見られる諸記述を、対象化の累乗として整理する試みを行う。まず、心に描かれるイメージを生成する視線、そのイメージを記述する視線があり、その両者に挟まれ中断される、入眠や夢にはいるための視線がある。次にイメージが観念の視線で新たなイメージとして記述される。最後の段階で、イメージを構成する諸対象についての視線（対象化）を、さらに対象化して記述する、というように吉本はイメージの対象化の累乗についてまとめている。

さらに「像としての文学」は文学批評とイメージの関連を論じるのだが、概念には生命は見えない糸として折り畳まれているという、対象化の累乗に関してきわめて重要な表現がなされる。概念は多様な感覚的な生理反射や反映の長い歴史のはてに獲得され、そして知覚はあとから概念の系列下にはいる。概念やそれによって織り成される文体に折り畳まれた生命の糸の量、生命の重畳量の豊富さ、生命の重なり密度が、文体の意味の展開につれてイメージ（「パラ・イメージ論」で見たように、概念が呼び起こすためにグラフィカルにはぼんやりとしているがそれに反比例するような多彩なイメージ）を呼び起こす。この折り畳まれた生命の糸は、存在が存在自体を反省したときの残像である純粹本質と、存在自体である具体的な存在物のイメージとの主観内での統一、すなわち対象化、そして対象化の対象化、さらに対象化の対象化の対象化という過程的構成をもつことがここに明示されたのである。

なお、文学論だけではなく、ファッションという表現、音楽という表現、舞踏という表現についても吉本はイメージの表現という観点から解明を進めたが、対象化の理論に関わる論点にしぼって紹介しておくにとどめよう。

「ファッション論」では、原初に裸身は靈魂の衣裳と見なされており、靈



魂が精神に代替されるとともに身体の衣裳としての裸身の概念が成立し、裸身という衣裳のイメージ価値は、垂直な視線束による視覚像と、水平曲面に沿ったポテンシャル線（ポテンシャル線の方向性が質的に激変する境目の点がカタストロフ点）の分布状態からできているという指摘があり、衣裳における対象化の対象化の一端が示される。次に「像としての音階」では、心的現象についての新たな知見が付加された。身体外部に仮設され、身体内部に引き寄せられる幻聴の音源のイメージを、乳幼児体験と原始共同体体験の二つの系列に整理し、対象化の対象化を累乗によって統合する際に失調を生み出す仕組みを解明している。そして「舞踏論」では、言葉は定型によって舞踊し、暗喩によって舞踏するという視点から、舞踏は身体表現であり、身体を文字のように使った暗喩の連続した重畳、すなわち自己表出の累乗であることが指摘されたのである。

『ハイ・イメージ論』には、以上のように対象化の理論にかかわる多様な論点、知見、洞察を見いだすことができるのだが、社会形成の理論についても「地図論」、「連結論」、「形態論」、「表音転移論」において新たな展開がなされている。ただし、社会形成の理論の射程はきわめて長く、動物的な群れから人間社会への転換という始源段階から、共同体の形成と累積による初期国家形成に至るまでを包括している。「地図論」は、世界視線から地表を見ることによって透視される地形図が、社会形成の歴史の舞台となっているという方法的な立場を鮮明にして、『共同幻想論』の歴史的事實的基盤についての議論展開となっている<sup>17)</sup>。そして「連結論」では自然都市から出発する都市形成論として社会形成論を展開し、「形態論」では対象化の理論の一環としてでもあるが、概念形成と形態認識を区別しつつ、原初的な自然都市にかかわる形態認識が検討される。さらに「表音転移論」では地名の表音の変化の

17) 『共同幻想論』の議論の射程は、日本列島における原初共同体から初期国家の起源に至る範囲に及ぶが、そこではあくまでも幻想論の水準での考察に限定されていた。

みならず、時間分布と空間分布で表音が変化する表出体としての言語に類比される体内言語としての遺伝子についての自然人類学の成果に学びながら、原初の日本列島における社会形成をになった人間にまで視野を広げている。

すでに『共同幻想論』において、共同幻想の生成および対幻想の生成を『古事記』や『遠野物語』をもとに解析した吉本は、「地図論」において社会形成の新たなイメージを、世界視線による地表の把握という新たな見方により、古代の社会形成のある局面の幻想論的展開の地理的基盤、すなわち幻想論的展開の舞台を当時の地理的世界の把握にもとづき解明し、その舞台的条件から逆に社会形成の歴史的過程の可能性を絞り込み、新たな知見に到達したのであった。

また「連結論」では原初の都市の形成過程が理論化される。樹木崇拜と丘陵地の巨石崇拜との特異な連結が日本初の自然都市の成立であり、単性的な禁忌を原理として出入りが規制され、自然都市に接する第二次的な自然都市が形成される。それははじめの自然都市の麓、ゆるやかな平坦地に形成され、はじめの自然都市との境界に首長が居住し、統治と祭祀の分離にしたがって中心は第二の自然都市へ移行する。第二次の自然都市群のうえをぎくしゃくしつつも滑走してゆく初期王権は、連結した全体を鳥瞰する祭儀を執行し、その国見の視点は中世、近世そして近代の都市像へ継承されていった。

さらに「形態論」では、対象化の理論でも紹介したように、形態を識知する過程（事象の固有性に命名する過程）と、実体に命名する概念形成の過程とは区別され、概念形成においてそのもののかたちは概念に対応する抽象度をもった共通の像として識知されているが、形態の識知のためにはそのものの本質把握が必要であるという視点が前提とされ、古代の形態認知の方法に議論が進められる。

古代の形態認知の例として地名を取り上げると、それは地理的な形態が反復され固定化されて生み出される。自然地勢とそこにおける自然現象、そこに集落をつくった自然人のすべてを自然物のように見立てて、地勢や住居や

場所の名称を抽象化していった最初の形態認識がもたらされる。それをもたらしたものは、縄文人と弥生人の文化、生産の差異と、その界面にうみだされた衝撃と同化の過程である。そして、いちばんはじめに地勢から形態として認知され、とりだされて信仰の対象となったのは、村落のまわりの低い山や丘陵であった。そこは交換の場所であり、ポテンシャルの差異が示される場所である。山の形態が同型を求めて樹木、人工的な木、祭祀用の木というように次々に変幻していったところにも形態認知の例を見ることができよう。

そして「表音転移論」では、さらに壮大なスケールの人類史、日本列島への人類の移動と社会形成の歴史について、音韻の変化についての議論や、自然人類学が解明した遺伝子レベル、ウィルスレベルの議論に基づき、社会形成の理論に新たな展開を行ったのである。

### 第三節 都市と消費社会の理論

『ハイ・イメージ論』に見られる現代社会論は多種多様である。『マス・イメージ論』は前述のように断片的ではあるが現代社会論としての多様な知見を提示しており、そこに示された現代家族論ないし現代の対幻想論は、『ハイ・イメージ』論でもたとえば性の表現の走行（走行する歩幅としての対象選択、走行の足を練り出す速さとしての表現）を論じた「走行論」や「形態論」にも継承され展開されていた。しかし、本節で焦点を合わせる現代社会論の論点は、『ハイ・イメージ論』の主要部分を占める都市論と、それに連動している高度産業化、資本主義の高度化がもたらした消費社会についての議論である。

都市論については、まず「映像都市論」で、現代都市が世界視線や普遍視線から見るとどのような地域に区分できるかを整理し、「多空間論」で、現代都市が世界視線から見ると多空間編成となることを示す。また「人工都市論」は、まさに現代都市の典型像としての人工都市が宮沢賢治によって先駆的に描かれていたことを論じ、自然は人工的自然として存在しうるし、せざ

るをえないと主張する。これは都市と農村の問題であり、高度産業社会論、消費社会論につながっていく。さらに「連結論」後半では、現代都市に見られる多空間の連結について、「分散論」では現代都市の空間の分散と連結が論じられる。

『ハイ・イメージ論』は「映像の終わりから」で始められた。「映像の終わりから」には本書の主要な議論展開の起点が備わっており、現代社会論として高度な資本主義の生産様式が、対象化の累進を促進し、そのような視線が生成されていることが示された。すなわち、高度消費社会を実現した生産様式についての議論と、現代都市を含む現在の世界を無限遠点から展望する世界視線の根拠づけにかかわる議論が行われていたのであった。

吉本は世界視線の議論を死に接触した心的世界についての議論と接続させる<sup>18)</sup>。いわゆる臨死体験における自己客体視の体験のイメージとしての意義ないし特徴は、擬視覚像、全方位のイメージの生成である。もう1つの眼の内在化、すなわち外部から包括的に視ている世界視線と自己視覚像に分割された状態である。それに類似するのはCG映像であり、視線の束が対象物に接触するのではなく、対象のあらゆる場所にまったく等価に透過して生み出された擬視覚像である。そして視線の場所は世界視線であり、世界視線が想像的な像空間の内部に内在化されて、いわば胎内視線に転化される。世界視線は死から照射される視線と交差し、無限の過去と未来に内挿ないし外挿され、そのイメージ可能性として胎内体験や死の体験が成立する。現在そのものの構成的な価値の概念が全体でつきあっているものが、死または未生の社会像によって暗喩されるものなのである。ここに社会イメージの終わりがもたらされ、終わりの社会イメージのイメージ価値は何か、未生の社会像、あるいは始まりの社会像とは何かが問われる。

それではエレクトロニクス産業革命がもたらした高度情報化社会の社会イ

18) 臨死体験論を含む死にかかわる吉本の議論は、『死の位相学』（高橋康雄によるインタビュー記録）潮出版社、1985年にまとめられている。

メージとは何か。それは高次な集積システム、高次な制御可能性をもったエレクトロニクス・システムの集積体であり、そこでは機械の経験を制御する人工脳化がつつぎつつぎと次元展開される。こうして手段の線型の総和から手段の線型的なマトリックスへと高度化し、映像差異や空間差異の消去、時間の同一性の差異化が帰結される。こうして「映像の終わりから」では、対象化の累乗の一つの極点ともいべき世界視線の成立、それと連動している対象化が高度化した生産様式の成立、そして都市の像化の可能性が明らかにされたのである。

都市の像化の議論が「映像都市論」につながる。そこでは、高度な世界都市の現在と近未来の全体のイメージが4つの地域によって把握される。高度な都市像の死あるいは終焉からの視線が加担してしかつくりえない高次映像の地域、そして農村との対比で生成された古い都市像と高次映像の新しい都市像とが折り重ねられた地域、これら2つの地域を核にして次の2つの地域が裾野として設定される。垂直に上の方からおりてくる世界視線と、人間の坐高や直立の高さに水平にのびる普遍視線とが交わるところで成立する広場や人工的な高層マンション地域、そして垂直に下の方から上へむかう逆世界視線と、人間の坐高や直立の高さに水平にのびる普遍視線とが交わる原っぱとそのうえの民家地域<sup>19)</sup>、これら2つの地域である。裾野を描くイメージの地域は現在の世界都市のイメージ空間の柱をなすものであるが、核となるイメージの地域はこれからの世界都市の中心的なイメージであると吉本は指摘する。

さらに「映像都市論」の最後で、都市と農村とを対立関係にあるとみなしたり、人工と自然が対立関係にあるとするいわゆる左翼的、進歩的な発想は高度な先進社会では無効であり、新たな段階とは何か絶えず探究されねばならないと吉本は述べる。これが80年代の吉本の左翼批判の基調音となった

19) 吉本の原っぱ論の発想の原点は「修景の論理」『情況』河出書房新社、1970年に見ることができる。また民家論の発想の原点は「都市はなぜ都市であるか—都市にのこる民家覚え書」『詩的乾坤』国文社、1970年に見ることができる。

のであった。

「多空間論」は超高層ビルについて議論を展開し、新しい多空間を大都市のいたるところで認知する事態が、現在の都市空間の変貌とともに生成されることによって、空間認知の想像力、想像力の空間認知の変容が問われていることを導出する。超高層からの俯瞰の視線があたえる实在の多空間は、想像空間への転機を迎える。超高層ビルは第二次の丘陵地、通常のビルは第二次の平野であるというように、公開性と非公開性を区別しつつ、古代中世の建造物や場所との類比が可能である。また超高層ビルは時間的な構築物でもある。

吉本は絵画の構成法と俯瞰した視覚像とを比較しつつ、次のように議論を進める。俯瞰した視覚像がしだいに時間（永遠化）の認知を導入し、絵画のイメージは現実の景観を俯瞰した人間の眼の印象と無関係に想像上の景観をつくることができるようになった。想像上の自在さ、空間と時間の認知の転換の自由を前提にした遠近と俯瞰の視線の想像上の復活と再生は、重要な空間の処理の契機であり、絵画の空間処理としては抽象、モンタージュ、コラージュの手法しか多空間処理の方法は残らない。現在の大都市の景観が実在から映像に転化する契機をもっており、大都市の多空間のコラージュと、コラージュ的な空間処理をした絵画とを比較すれば、超高層からの俯瞰の視線があたえる实在の多空間、その想像空間への転機を見ることができる。

「人工都市論」では現代都市社会における自然環境について、宮沢賢治の作品を論じそのユートピア理念を明らかにしつつ検討する。吉本は宮沢の作品から、自然は人工的に生成しうるし、自然よりもすぐれた自然さえ作れること、善行は極限で身体を察知の気体と化し、瞬時に時間、空間の制約を超えて他者の察知に感応することによるドリームランドの成立を確認する。

次にトーマス・モアのユートピア構想を論じ、その平等の神経症という問題、都市と農村の分裂以前であることの限界を指摘し、都市と農村の分裂以後の構想は、都市と農村の分裂への対応としての田園都市の形成にあり、宮

沢賢治の構想もまたそうであったと見る。しかし社会主義のユートピアは、世界から閉ざされた管理収容所とならざるをえない。権力なしにはユートピアはできないが、それが存在してはユートピアではないという国家や社会の権力の矛盾がそれをもたらす。社会主義のユートピアも結局は都市農村の融合形の共同体であり、大都市は自然よりも自然な人工的な自然を作り出せる段階でそのようなユートピア像は無効と化してしまう。したがって新たなユートピア像の可能性が探究されねばならないと結論づける。そして最後に吉本はその可能性の一つを、資本体と経営体の分裂を統合することをユートピア理念としてもつ財力が実現しうる人工都市、すなわち富の分配の正規分布地形の中央値の両側に合意の中心をおく消費都市に見いだす。

「連結論」はその前半で、前述のように社会形成の理論として、古代、中世、近世における都市形成論が描かれ、後半ではそれを継承して現代都市論が展開されている。前半において第二次自然都市という概念が提示されたが、現代都市に林立するそれぞれのビルディングが第二次自然都市のひとつの村落共同体とみなされ、ビル間の道路は共同体境界であって道路ではないと指摘される。第二次自然都市の道路は個々のビルの内部にあるというのである。そしてかつての共有空間は、現代都市ではしだいに空中に押し上げられ、世界視点の方向に共有のイメージ領域が拡大していくのが必然の方向と考えられる。さらにビルとビルとを連結する空中の歩廊が想定され、空中街が近未来の高次の自然都市の究極の映像として展望される。

「分散論」は、自然物を加工して大なり小なり秩序をもった構築物をつくりあげる像化の領域と、高次映像のはじまりの問題を取り上げる。秩序化され飽和した状態から、より無秩序な混沌とした方向へというように、イメージの分散を生成する都市が現れ、都市のイメージ化が起こる。そして大都市から衛星都市へと、像化の影響は均質に分散される。都市化の確率、像化地域発生の確率は冪乗数で増加し、都市のイメージ化が大都市領域から、衛星都市をも包括した領域まで膨張しというようにエントロピー増加の方向性を

もつ。高度な情報化が進むにつれて、高度情報網を密に結びつけて同時性をもたられば、都市の目に見えない膨張，目に見えない都市への膨張が生じ、これもまた像化をもたらす。こうして都市のイメージ化は、フィジカルな過密化とメタフィジカルな高度情報の密接化の二重の意味をもつ。

「分散論」の後半では遷都論（首都移転論）をめぐって議論が展開される。機能分散の主張があるが、しかし重要なのは像化の二重性を密にするかどうかであって、制度や建物の移転が本質ではなく、大都市の像化の分散が重要である。場所の移動と分散ではなく、像化の分散すなわち場所の遠隔化や近接化とは関係なく、高度情報化網の整備の方向線の上で疎密化すること、これが遷都の中心課題である。文明史の必然的な分散の方向性にたいして、大都市でエントロピー増大の方向へ流れて行く像化にたいして、エコロジストたちのような反動的な場所からではなく、高次な場所から抗おうとすれば、新たな自然を形成するという事しかない。都市と農村の対立という図式、それを前提にした自然保護の理念は古典的な虚像にすぎない。都市と地域都市をつなぐ像化の地域の連鎖が必要である。

大都市は高度なイメージを生成するところから分散されていく。極限としての大都市は全体がイメージ化された都市であり、都市居住の極小化がすすむ。現在は過渡期で、「映像都市論」で述べたように4つの地域が成立する。大都市人口の分散は、衛星都市への住居の分散をもたらす。像化のエネルギーが住民を都市内部に結び付けている力（要因）を超えたときに移動がおり、住民の自由な移動と自由な行動が求められる。ここでボードリヤールの日本論を取り上げ<sup>20)</sup>、そこに吉本の以上の主張を重ね合わせる。日本は属領性および封建性のもつ力を脱属領性および無重力状態のもつ力に変えることに成功した。日本は地球の衛星であり、東京は日本の小衛星である、というのがボードリヤールの日本論であった。吉本は像化の進展、飽和、すると垂直方

20) 田中正人訳『アメリカ』法政大学出版社、1988年（原著は1986年）



向の像化に転換されるという点、大都市の住民が自由に移動し、衛星都市に移動した住民が自由な行動半径をえるような理想状態では、大都市は衛星都市や内部の人工的な緑地をつつんだまま世界視線に沿って像化し、垂直浮上の階程にはいるという点をそこに見いだす。こうして大都市と中小都市の格差縮小の方向性、そしてまた分散系の定方向性と散逸系の多方向性が生じると予測する。

異化による都市展開の方向は、ループのつながりをつくりながら大都市のなかの緑地と住居地を内にかこみこみ、ループを完成すると次の段階で住居や緑地をループの外におくりだし、また次のループをつくってつながりながら広がって行く画像に示される。ちいさな未来都市像をつなげながら広がっていく画像である。個々のビルが垂直像化へと転じつつ、つぎつぎに広がって行く都市像が、異化と像化とのかかわりを象徴的にあらわす。超高層ビルが完成されたループの象徴であり、ひとつのループとして未来都市、すなわち垂直性の像化へ転じ完成した姿の象徴である。異化のループが完成してつぎのループへつながっていくかたちは、ループのなかに緑地と住居、いいかえれば起源と伝統をつつんでは、また外へ追いやりループの内側を空虚に、という反復と連結にある。

以上が都市論の展開である。80年代の日本で高度産業化が進展し、都市に超高層ビル群が登場してきた現実を、その未来に向かう意義において把握しようとするのが吉本である。第1に、変動への反動として、自然保護の声も強くなりつつあったが、吉本は自然の人工化、人工化された自然の可能性によってそれを批判した。第2に、対象化の理論の現代版としての世界視線、それによる都市の映像化、像化の理論である。未来都市は、自然を包括し、あるいは自然を人工化し、水平的な広がりとは垂直的な広がりをもつ。その可能性は、現在の都市の像にうかがうことができる。なお、都市の理論はその背景に高度産業社会、消費社会の理論をもっている。それは現代資本主義についての理論でもあり、すでに拙稿でその概要を明らかにしたのであるが<sup>21)</sup>、

その際には『ハイ・イメージ論』を取り上げることができなかった。しかし、『ハイ・イメージ論』に見られる高度産業社会、消費社会についての議論は、一層基礎的な論点に詳細に取り組んでおり、ここで紹介しておく価値がある。

消費社会論としては、冒頭の「映像の終わりから」を受けて、「エコノミー論」では、消費資本主義ともいうべき高度資本主義が、ふるい自由のイメージからあたらしい自由のイメージの転換（60年代から80年代にかけて転換した）をもたらした<sup>22)</sup>、生産と消費が同一化した理想の経済人に近いイメージをもつ高度な消費が可能となった大衆を生み出したことを論じ、次に「消費論」では、高度消費社会論をボードリヤール批判を通じて展開する試みを行っている<sup>23)</sup>。

すでに紹介したように「映像の終わりから」では、エレクトロニクス産業革命がもたらした高度情報化社会の社会イメージを、高次な集積システム、高次な制御可能性をもったエレクトロニクス・システムの集積体として把握し、機械の経験を制御する人工脳化がつつぎ高次元化して展開されると吉本は考えていた。また、第二節で紹介した「自然論」において、時間－空間の変様体が価値化の領域の基底にあること、そして価値化の領域は道具の高度化によって線分、平面、立体、そして次第に多次元体の図像にちかづくことが指摘されたのであった。高度産業社会においては人間と自然の相互作用が、人間と自然のありかた自体を根本的に変様させてしまい、対象化によって生み出せられる価値も単純な水準にとどまることはできないのである。以

21) 拙稿「吉本隆明の社会理論（3）資本主義、国家、運動」『桃山学院大学社会学論集』第38巻第2号、2005年。

22) 1970年代論については小論ながら「1970年代の光と影」『大情況論』弓立社、1992年がある。また『大情況論』には吉本の現代資本主義論、消費社会論がまとめて収録されている。

23) 吉本はボードリヤールへの関心は強く、90年代に本人と対談した。その記録と両人の講演録が通訳した塚原史の構成・訳の『世紀末を語る－あるいは消費社会の行方について』紀伊國屋書店、1995年である。

上の視点を保持しつつ「エコノミー論」と「消費論」が展開された。

「エコノミー論」では、自由のイメージの変換から始まり、マルクスの生産と消費の概念を起点に解放と自由の行方を展望し、あらたな社会像を探究し、さらに改めて市場、商品、労働力、価値といった基礎概念の検討を進め新たな労働者イメージ、理想の経済人のイメージを構築し、それを基盤に新たな経済、生産様式のイメージ、大衆の解放、大衆の自由の実現のイメージを明らかにした。

戦後日本の高度経済成長によって、貧困からの解放が一定の達成点を越えた社会が成立し、そこでは自由ないし解放は、新たなイメージを必要とする。高度産業社会は消費社会であり、生産は消費であり消費は生産であるという原理が、時間的空間的遅延を包含しつつ貫徹される。そのような社会ではどのような労働者像、経済人が理想なのであろうか。一定量の資本を保有し、労働し賃金を獲得し、選択的に消費する。休日が増え、利子所得が増え、選択消費の可能性が拡大する。そのためには投資を繰り返し産業を高度化する必要がある。むしろ不安定な流動と沸騰が安定の基盤となる。労働者の健康管理、教育の充実、それが技術の進歩につながり、労働者の経済的地位を向上させる。資本蓄積と総需要管理の高度化が求められる。貧困からの脱出はその意欲を高め、それを支援する制度的枠組みを整備することが必須条件となる。流動がとまると社会は死なねばならないのだ。

そして「消費論」では、ヘーゲルやマルクスの自然論、人間の特性の議論から始めて、生産と消費の高度化について検討して行く起点を示し、選択的消費や産業の高度化を遅延というキー概念によって解析し、消費社会論を展開し高度産業化の理論的把握を試み、ボードリヤールの消費社会論の批判的検討を通じて、独自の消費社会論、高度産業社会論の構築にまで行き着いている。

付加価値化、生産手段の高度化、関連技術の開発と多様化、これらの生産の高度化は選択支出とのあいだの時空的遅延を産出し、1つの構造に組み立

て生産と消費を連結する。消費は遅延された生産そのものとなる。そのような消費社会をボードリヤールは分析するのだが、消費の高度化を記号的消費の拡大に限定してしまい、しかもそこに格差と不平等の影を見て、消費社会に批判的になってしまうという左翼的こだわりから脱却できていない。消費社会は資本主義社会の歴史的終焉ではないし、産業の高次化した社会が貧しい平等へ逆行することはありえない。高度産業化、産業の高次化が消費社会への変貌を可能にしたが、それがもたらす不安定感や不安感にボードリヤールもとらわれ、消費社会のもつ解放の可能性を十分に見ることができなくなっていると吉本は批判するのである。

以上の2つの論考は、80年代後半から90年代前半にかけて吉本が諸著作で提示したあらたな資本主義、新たな経済社会についての本格的検討と連動し、イメージ論という新たな視点から同様の議論の展開を試みたものと言えよう。既知に安住することなく、また古典的な理念にたてこもることなく、絶えざる変動を含む未知の現在に果敢に取り組み新たな視野を開き、現在の可能性を見出し、未来への展望を開く。これこそ現代社会論に求められる姿勢と言えよう。

## お わ り に

本稿が8作目となるこの連作で、吉本隆明の社会理論の全体像と可能性を探究する試みを続けて来た。一般的社会理論と現代社会論の2つの視点によって、吉本の著作群から有用な論点を抽出し整理するという試みである。本稿が取り扱った、80年代から90年代前半にかけて執筆された吉本の後期の理論的著作の代表作である2つの著作には、前期後半から中期にかけての吉本の理論的三部作である『言語美』『共同幻想論』『心的現象論』の達成点、すなわち筆者の命名するところの対象化の理論が再確認されるとともに、それらが諸問題に応用され、さらには80年代以降の日本社会の変化、変動に対応し思索が深められていることを見ることができる。

対象化の理論は、意味づけと資源動員を基本的視点とする、人間と社会についての基礎理論であり、吉本はそのような視点を堅持しつつ、実に多彩な対象を具体的に解析しているのである。本稿のあつかったイメージ論の諸論稿にもそれが如実に示されていた。なお、対象化はたんに一般理論的な範囲をカバーするだけではない。現代社会論においても都市論における世界視線という概念に見られるように、あるいはまた、消費資本主義ないし高度資本主義の生産様式の編成や展開に見られるように、それは対象化の累乗の果てに登場した、まさに現代的水準での対象化のありかたなのである。

こうして本稿では、一般的社会理論としての対象化の理論や社会形成の理論、現代社会論としての都市論や高度資本主義論など、有用な理論的視点をイメージ論から抽出し整序する試みを遂行し、一定の成果を挙げる事ができた。吉本の議論について批判的な向きは、理論的非一貫性や混乱をあげつらい、都市論や消費社会論には執筆当時のバブル時代の過剰な影響を見るかもしれないが、本稿が示したように吉本の理論的一貫性に揺るぎはなく、また現代社会論としても表面的な変動の深層にある動かしがたい方向性は鮮明に把握されていると評価できるのである。ただし、それらの一層の理論的展開は我々に継承された課題であることを銘記したい。